

# ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む ——志向性に係わる部分（その1）——

黒 崎 宏

## I

以下は、ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』の中で、特に「志向性」に係わると思われる部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解読したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

427. 「私が彼に話しかけている間、私は、彼の頭の中で何が起こっていたかを、知らなかった。」かく言うとき人は、[彼の頭の中での] 脳過程ではなく、[彼の頭の中での] 思考過程を考えているのである。この「彼の頭の中で起こっていた事」として「思考過程」を考えるという像は、真剣に取り上げられるべきである。我々は、実際、彼の頭の中を見たいと思う。とはいえ実は我々は、[かく言うことで、] 言うなれば、我々は彼が考えている事を知りたいのだ、という言葉で思っている事のみを意味しているのである。私は言いたい：我々はこの「彼の頭の中で起こっていた事」として「思考過程」を考えるという生き生きとした像を持っている。——そして、この像を使用している。[しかし] この像の使用は、「我々は彼が考えている事を知りたいのだ」という[正しい] 像に矛盾し、[思考過程という] 心的なるものを表わして[しまって] いるのである。[私を知りたいのは、実は、彼の頭の中にある思考過程ではなく、彼が考えている当の事なのである。そして、彼が考え

ている当の事は、彼の頭の外にあるのである。]

428. 「思考、この奇妙なもの」——しかし思考は、我々が考えているときには、奇妙なものとは思われない。思考は、我々が考えている間は、謎に満ちたものとは思われない。唯、我々が言わば回顧的に「思考は如何にして可能であったのか」と言うとき、思考は謎に満ちたものと思われるのである。思考がその[思考の]対象自体を扱うという事が、如何にして可能であったのか。我々には、あたかも我々は思考でもって実在を捕まえたかの如くに、思われるのである。[しかし我々は、思考でもって実在を捕まえるのではない。思考と現実の一致ないしハーモニーがあるのみなのである。]

429. 思考と現実の一致ないしハーモニー [和合] は、私が誤って、或るものを赤い、と言ったとき、そのものはそれでもとにかく赤くはない、という事にある。そして、私がある人に「それは赤くはない」という文の中の「赤い」という語を説明しようとするときには、私はそのために赤い何かを指し示すのである。[私が誤って、黄色いものを「赤い」と言ったとき、その黄色いものはそれでもとにかく赤くはない。これが思考と現実のハーモニーである。これに対し、私が甘いものを「赤い」と言ったとすれば、それは誤りですらない。誤りは、否定すれば正しくなるが、その甘いものは、「赤くはない」とすら言えないからである。赤くはないならば、黄色なのか、緑なのか、茶色なのか……、といくら続けても、甘いという事は出来来ない。そしてこの場合には、思考と現実の間にはハーモニーは存在しないのである。]

430. 「物差しをこの物に添寄せたとしても、物差しは、その物がどの位の長さであるかを、語りはしない。むしろ物差しは、それ自体では——私はそう言いたいのだが——死んでおり、思考が行う事を何も行わないのである。」[これは『論考』の思想である。『論考』においては、思考が息吹を与えるのである。]——あたかもこの事は、以下のような事である。即ち、我々は、生きている人間において本質的な事はその外的な姿である、と思ひ込み、そして、木の塊をその姿に作り上げ、そして、生き物とちっとも似ていないその死んだ木偶の坊を恥づかしい思い

をして見た、というような事である。[生きている人間において本質的な事はその外的な姿ではない。同様に、物差しにおいて本質的な事はその外的な姿ではないのである。]

431. 「命令とその実行の間には、割れ目がある。この割れ目は、理解に依って埋められなくてはならない。」[これは正しくない。]

「理解において初めて、命令は、我々はそれをしなければならぬ、という事を意味するのである。命令——それは[理解においてでないならば]単なる音であり、インキのしみに過ぎないのである——。」[これも正しくない。]

432. 如何なる記号も、それだけでは、死んでいるように思われる。何が記号に命を与えるのか。——使用において記号は生きる。使用において記号は生命の息吹を持つのであろうか。——或は、使用が記号の息吹なのであろうか。[どちらも正しい。]

433. 我々がある命令を与えるとき、あたかも、その命令が欲していた最後のものは表現されないままで留まっていなければならない、かの如くに思われるかもしれない。何故なら、命令とそれに従う事の間には、なお依然として割れ目が残っているのであるから。私は例えば、ある人に或る一定に運動——例えば、手を挙げる、という運動——をしてもらいたいと思う。そこで私は、その運動がどんな運動であるかが完全に明らかになるように、彼にその運動をしてみせる。その姿は曖昧ではないと思われる。しかしそれも、彼が、彼はこの運動をしなければならぬ、という事を如何にして知るのか、という事が問題にならない内である。——彼はそもそも、私が彼に与えた記号を如何に用いるべきか、を、如何にして知るのか。——ここで私は、例えば命令を、他人を指さし、元気づける振舞をして、等々、といった、更に別の記号に依って補おうと努めるであろう。ここにおいて、命令は口ごもり始めるかの如くに思われる。

記号は、不確かな方法に依って、我々に [ある記号の] 理解を呼び起こそうと努めているかの如くである。——しかし、我々が記号を理解するとき、如何なる記号で理解をするのか。[如何なる記号によって、で

もない。さもないと、無限後退に陥るから。我々が記号を理解するのは、教育によってである。]

434. 振舞は範例を示そうとしている——と、人は言うかもしれない。しかし振舞には、その様なことは出来ない。[振舞には、「範例」という部分が入っていないから。]

435. 人が「如何にして文は、表現するという事を行なうのか」と問うとき、——答えは、次のようであるかもしれない。「君はそんな事を知らないのか。君が文を用いているとき、君はそれを見ているのではないか。」[これは、危険な言い方である。それは、「見ている」という事をどう理解するかが問題になるから。]何も隠されてはいないのだ。

如何にして文はそれを行なうのか。——君はそんな事を知らないのか。何も隠されてはいないのだ。[これがワイトゲンシュタインの答えである。]

しかし「君は確かに、如何にして文はそれを行なうのか、という事を知っている。何も隠されてはいないのだ。」という答えには、人は次のように言い返したいであろう。「その通りだ。しかし、全ては余りにも素早く流れ去って行くので、私はそれを言わばもっと幅広くバラバラにして見たいのだ。」[これは誤りである。さきに「君はそれを見ているのではないか」と言うときの「見ている」をこの様な意味で理解してはいけない。例えば「手を挙げろ」という命令文は<手を挙げろ>という命令を表現している。我々はこの事を、言語ゲームの中での「手を挙げろ」という文の使用全体において見るのであって、「手を挙げろ」という命令を一つの事象として分析的に見るのではない。]

436. ここにおいて人は、哲学する事のかの袋小路に、やすやすと陥ってしまう。そこでは人は、課題の困難は、素早く摑むことが困難な現象、するりと抜け出てしまう現在の経験、等々、が我々に依って記述されねばならないのだ、という事があると信じているのである。そこでは、我々には日常言語は余りにも荒っぽいと思われ、そして我々は、日常語っている現象に係わらねばならないのではなく、「いともやすやすと消え去る現象——それは、その出現と消失に依って我々が日常語ってい

る現象を近似的に作り出すのであるが——」に係わらねばならないかの如くに、思われるのである。[我々は、本来は言語の問題——文法の問題——であるものを、事実の問題であると思ひ誤る事によって、哲学する事のかの袋小路に陥ってしまうのである。]

(アウグスチヌス曰く。それらは最も明白かつ身近なものなのですが、その同じものが他方ではあまりにも隠されていて、その発見が新奇なことになるのでございます。)

437. 願望は、何がそれを満足させる、或は、満足させるであろうという事を、予め知っているように思われる。命題、或いは思いは、何がそれを真とするかという事を、たとえそれがここには全くないとしても、予め知っているように思われる！ 未だここにはないものをこの様に規定する事は、何に由来するのか。この様な専制的要求 [は何に由来するのか]。(「論理的ねばならぬの堅さ」) [これがこの願望を満足させる、という事は、「これ」とその願望との間の論理的関係——文法的関係——である。それが「論理的ねばならぬ」である。「これ」はその願望を満足させねばならぬのである。]

438. 「計画は、計画として、充足されない何かである。」(願望、期待、推測、等々、の様に)

そして、ここで私は思う：期待は、充足されていない。何故ならそれは、何かについての期待であるから。思い、意見、は、充足されていない。何故ならそれらは、何か、現実の何か、思いとか意見とかいう事象の外部にある何か、実際にそうである、という思いであり意見であるのであるから。[思い、意見、は、それらの外部にある何かについての思いであり、意見なのである。]

439. どのような意味で人は願望、期待、信念、等々、を「充足されていない」と呼べるのか。不充足についての我々の原像は何か。それは空洞なのか。そして人は空洞について、それは充足されていない、と言うであろうか。そう言うことは、また比喻なのであろうか。[比喻である。]——我々が不充足と呼ぶものは、感じ——例えば空腹の——ではないのか。[比喻としては、そうである。]

我々は、表現の或る一定の体系において、或る対象を「充足」という語と「不充足」という語によって記述する事が出来る。もし我々が、例えば空洞の円筒を「不充足の円筒」と呼び、それに物をぎっしり詰めた円筒を「その充足」と呼ぶことに定めるとすれば。

440. 「私は林檎を食べたい」ということは、私は、林檎が私の不充足の感じを静めるであろう、と信じている、という事を意味してはいない。[「私は林檎を食べたい」と言うことは、願望の表出であるが、] 私は、林檎が私の不充足の感じを静めるであろう、と信じている、という事は、願望の表出ではなく、不充足の表出である。

441. 我々は、本性によって、そしてまた或る一定の訓練と教育によって、或る一定の状態においては願望の表出を自ら行なうようにされている。(勿論、その様な「状態」が願望なのではない。) 私は、私が願望している事を、私の願望が充足される以前に知っているか否か、という問題は、このゲーム [本性的ゲーム] においては全く現われ得ない。そして、或る出来事が私の願望を沈黙させるという事は、その出来事は私の願望を充足する、という事を意味しはしない。[そしてまた] たとえ、私の願望が充足されるとしても、おそらく私は、充足されないであろう。[その願望が充足されるのみであるから。]

他方、「願望する」という語はまた、次のようにも用いられる。「私は何を願望しているのか、私自身知らない。」(何故なら、「諸願望は私自身から願望されているものを被い隠すから。)

もし人が「私は、私がそれを手に入れる前に、何を手に入れようとしているのか知っているのか。」と問うたとすれば、どうであろう。もし私が言語を用いることを学んでいたならば、私はそれを知っているのである。[「願望」という語の意味には、手に入れようとしているものが何であるかを知っている、という事が含まれているから。]

442. 私は、或る人が銃を構え狙いを定めているのを見て、言う：「私は銃声を期待している。」銃声が出た。——どうだ、君はそれを期待していた。それなら、その銃声は何らかの仕方ですでに君の期待の中に在ったのか。[在ったのだ。文法的に在ったのだ。] 或は、君の期待は、ただ

別の観点において、銃声がしたという事と合ったのか。[違う。] この銃声は君の期待の中に含まれてはいず、期待が充足されたときに、ただ偶然的事象として付け加わったのか。——しかし、そうではない。銃声が生じなかったならば、私の期待は充足されなかったであろう。銃声が私の期待を充足したのだ。銃声は充足に対して、二番目の客が私が期待していた客に付け加わったように、付け加わったのではない。——この出来事に際し、期待の中にも無かったものは、偶然的事象であり、神意の添え物であったのか。[そうだ。] ——しかし、それでは一体、何が添え物ではない物なのか。[期待の中に在ったものが、添え物ではない物である。] では、この銃声の何か或る物が既に私の期待の中に生じていたのか。[生じてはいない。在ったけれども、生じていたのではないのである。] ——そして、一体何が添え物であったのか。[そんなものは存在しない。] ——何故なら、私は銃声の全体を [丸ごと] 期待していたのではなかったのか。

「銃声は、私が期待していた程には、大きくなかった。」——「それなら、君の期待の中で、もっと大きな音がドンとしたのか。」「勿論、しない。」「我々は、文法的存在と事象としての存在を区別しなくてはならないのである。』

443. 「君が想像していた赤は、君が眼の前に見ている赤と、しかし確かに同じではない (同じものではない)。それでは、君は如何にして、君が眼の前に見ている赤は君が想像していた赤である、と言えるのか。」「君が想像していた赤は、君が眼の前に見ている赤と、実は同じなのである。したがって、君が眼の前に見ている赤は君が想像していた赤である、と言えるのである。』 ——しかしこれは、「ここには赤い染みがある。」という命題と「ここには赤い染みがない。」という命題に類似してはいない。[先の対比は、「君が想像していた赤」と「君が眼の前に見ている赤」であり、今度の対比は、「赤い染み」の存在と非存在であるから。] この二つの命題には、[同じ] 「赤い」という語が現われている。それ故にこの「赤い」という語は、[同じ] 赤い何かの存在を指示することは出来ないのである。[「ここには赤い染みがない。」という命題は、「ここには赤い染みがある」という事を一度肯定し、次にそれを否定するのではなく、端的に「ここには赤い染みがない」という事を主張しているのである。

「ここには赤い染みがない。」という命題における「ない」は、命題の中で赤い染みの存在を否定しているのである。したがって、「ここには赤い染みがない。」という命題における「赤い」という語は、赤い何かの存在を指示することは出来ないのである。したがって、その否定命題であるところの「ここには赤い染みがある。」という命題における「赤い」という語も、赤い何かの存在を指示することは出来ないのである。世界と関係がつくのは、文が最小単位なのである。]

444. おそらく人は、「私は、彼が来ることを期待している。」という命題における「彼が来る」という言葉を、「彼が来る。」という命題における「彼が来る」という言葉とは、違った意味で用いている、という感じを持っている。しかし、もしそうであるとすれば、如何にして私は、私の期待は充足された、と言うことが出来るのか。もし私が、「彼」という語と「来る」という語を、例えば直示定義に依って説明しようとするれば、それらの語についての同じ説明が、それら二つの命題の場合に適用されるであろう。

さてしかし、人は次のように問い得るかも知れない：彼が来るとき、それはどう見えるのか。——ドアが開いて、或る人が入って来る、等々。——彼が来ると私が期待するとき、それはどう見えるのか。——私は部屋の中をあちこち歩き回り、時々時計を見、等々。——しかし、一方の事象は他方の事象と些かの類似性も有していないではないか！ そうだとすれば、如何にして人は同一の言葉 [「彼が来る」] をそれらの記述に使用し得るのか。——しかしながら私は、あちこち歩き回りながら、おそらく「私は、彼が入って来ることを期待している。」と言うであろう。——そうすれば、[それら二つの事象に] 或る類似性は在るのである。しかしそれは、如何なる種類の類似性か?! [同一の言葉が用いられている、という意味での類似性である。]

445. 言語において、期待と充足は接触する。[同一の言葉が用いられているので、両者は接触するのである。]

446. 「事象は、それが生じたときは、それが生じないときと違って見える。」と言うことは、滑稽ではないか。[事象が生じないときには、そ



もそも事象は見えないのである。その意味で、「違って見える」と言うことは滑稽である。しかし、生じていない事象を想像することは可能ではないか。勿論、可能である。例えば、期待とは、生じていない事象の実現を期待することである。このとき、期待された生じていない事象と実現された事象は同じに見えなくてはならない。この意味でも、「違って見える」と言うことは滑稽である。] 或は、「赤い染みは、それが眼の前にあるときは、それが眼の前にないときと違って見える。——しかし、言語はこの違いを無視する。何故なら言語は、[一つの] 赤い染みについて、それが眼の前にあるかないかを語っているのであるから。」[と言うことも、滑稽ではないか。] [言語はそもそも、「赤い染み」について語っているのではない。「ここには赤い染みがある」とか「ここには赤い染みがない」とかいう事について、語っているのである。]

447. [違って見える、という] この感じは、あたかも否定命題 [例えば、「火事ではない。』は、或る命題 [「火事だ。』を否定するために、その命題 [「火事だ。』をまず或る意味で真としなくてはならないかの如くに感じられる、その感じである。[否定命題に対して、それによって否定されるべき肯定命題が、影の如く感じられるのである。]

(否定命題の主張は [それによって] 否定される [肯定] 命題を含んでいるが、しかしその [肯定命題の] 主張を含んではない。) [ましてや否定命題の主張には、それによって否定される肯定命題の想像などは含まれていない。「火事ではない。」という否定命題の主張には、否定されるべき「火事だ」という想像は、含まれていないのである。その様な想像は、跡形もないのである。]

448. 「もし私が、私は昨夜夢を見なかった、と言え、それでも私は、何処に夢を求めるべきかを、知らなくてはならない。即ち、「私は夢を見た。」という命題は、現実の状況で用いられるならば、偽であるかも知れないが、しかし、無意味ではない。」——ではこの [君は昨夜夢を見なかった、という] 事は、君はそれでも何かを、夢が生じた場所を君に意識させる言わば夢の暗示を、感じたという事を、意味しているのか。[意味していない。]

或は、もし私が「私は腕に痛みを持っていない。」と言え、これは、

私は、痛みが生ずるかも知れない場所を言わば暗示するところの、痛みの感覚の或る影を持っている、という事を意味しているのか。[意味していない。]

現在の痛みの無い状態は、どのくらい痛みの可能性を含んでいるのか。[無限に含んでいる。但しそれは、「文法的」にであって、認識される必要も想像される必要もない。]

ある人が、次のように言ったとする。「痛み」という語が意味を持つためには、痛みが生じたとき、人はそれを痛みとして認識する事が不可欠である。」——このとき人は、答えることが出来る。「そのような事は、人が痛みが無いことを認識する、という事より、もっと不可欠であるわけではない。」

449. 「しかし、私が痛みを持てば、それはどの様なものなのか、という事を、私は知らなくてはならないのではないか。」「そんなことはない。」——人は、命題の使用は、人は夫々の語に何かを想像する、という事で成り立っている、という事 [これは『論考』の思想である。] から、脱却していない。

人は、言葉を頼り、操作して、時とともに、言葉をあれやこれやの像に変えてゆく、という事 [これは、哲学的迷いの原因である。] を、よく考えてみない。——この事は、あたかも人は例えば、ある人が私に渡そうとしている雌牛についての指示書には、それが意味を失わないために、常に雌牛のイメージが随伴してはいなくてはならない、と信じているようなものである。

450. 人は、或る人がどの様に見えるかを、知っている、想像することが出来る。——しかしまた人は、或る人がどの様に見えるかを、やって見せることも出来る。人は、やって見せるためには、想像しなくてはならないのか。[そんなことはない。]そして、やって見せるという事は、想像する事と同様に強力ではないのか。[その通りである。]

451. もし私が或る人に「君はここに赤い丸を想像せよ！」という命令を与え、——そして私が、命令を理解する、という事は、もしその命令が遂行されるとすれば、それはどういう事であるかを知っている、

——或いは、それどころか、それはどういう事であるかを想像できる、という事を意味している、と言うとすればどうであろう。[それは言い過ぎである。ただ単に、知っていればよいのである。]

452. 私は言いたい。「もし或る人が[私の]期待という心的事象を見ることが出来るとすれば、彼は、[私によって]期待されているものを見るに違いない。」——しかし、この事はまた次のようでもあろう：[私による]期待の表現を見る人は、[私によって]期待されているものを見るのである。そして、如何にして人は[私による]期待の表現をそれとは別の仕方、別の意味で、見ることが出来ようか。[出来るはずがない。]

453. 私の期待を知覚する人は、[私によって]期待されている事を直接知覚するのでなくてはならないであろう。即ち、[私について]知覚された事象から[私によって]期待されている事へ推論するのではなくてはならない、というのではないであろう！——しかし、ある人が——例えば、[彼自身の]期待の表現を知覚する[これは、場合によっては、可能であろう。]、というのでないならば——[彼自身の]期待を知覚する、と言うことは意味を為さない。[ある事を]期待している人について、彼は期待している、と言う代わりに、彼は期待を知覚している、と言うことは、表現の馬鹿げた歪曲であろう。[期待は、するものであって、知覚するものではないのである。]

454. 「全ては既に……の中にある」[と人は言う。][しからば、]この矢印→は指し示している、という事はどういう事になるのか。[これに対し、人は言うかもしれない。]矢印は既に何かをそれ自身とは別にそれ自身の中に抱いているように見えないであろうか[、と]。——[これに対し、また別の人は言うかもしれない。]「違う。死んだ線ではなく、ただ意味という心的なるもののみが、指し示すという事が出来るのだ」[、と]——このように言う事は、真でもあり偽でもある。矢印は、人がそれを使用するときのみ、指し示すのである。[432を見よ。]

矢印の指示は、魂のみが遂行できる魔術ではないのである。

455. 我々は言いたい：「我々が何かを思うとき、それは（如何なる種類のものであれ）死んだ像を抱くという事ではない。それは、あたかもある人に歩み寄るようなもの、なのである。」我々は思われたものに歩み寄るのである。[像を媒介にするのではなく、じかに歩み寄るのである。]

456. 「人が思うとき、人は自ら思うのである。」[人が思うとき、]人は自ら動くのである。[人が思うとき、]人は自ら突進するのである。そしてそれ故、[人が思うとき、]人はその突進を観察することも出来ない。確かに出来ない。[思いは透明なのである。]

457. そうだ。思うという事は、あたかもある人に歩み寄るようなもの、なのである。

458. 「命令はそれに従うことを命令する。」それなら命令は、それが従われる以前に既に、それに従うこと [がどういう事であるか]を知っているのか。[勿論、知っている。]——しかし、それに従うこと [がどういう事であるか]を知っている、という事は文法的命題であった。ある命令が「コレコレをなせ！」というものであるならば、人は「コレコレをなす」ことをその命令に従う事と呼ぶのである、という文法的命題であったのである。[「あった」という事は、この論点は既に前に言われていた、という事である。しからば、それは何処においてであったのか。しかし、今のところ私にはその場所は不明である。]

459. 我々は「命令はこれを命ずる——」と言う。そして [我々は]それを為す。しかしまた [我々は]、「命令はこれを命ずる。私は……を為さなくてはならない。」[とも言う。]我々は命令をある時は或る命題に、或る時は或る模擬行為 [(デモンストレーション)] に、そしてある時は [本来の] 行為に、翻訳するのである。

460. 或る行為が命令に従っているという事の正当化は、次の様であり得るであろうか。「君が「私に黄色い花を持って来てくれ」と言った。そして、それに応じて、ここにあるこの花が私に満足の感情を与えた。

それ故、私はその花を持って来た。」ここにおいて人は、次のように答えるべきではないのか。「[私は君に、私に花を持って来てくれ、とは言ったが、]しかし私は、その様な私の言葉に応じるものとして君にその様な[満足の]感情を与えるであろう花を持って来てくれ、とはいいはしなかった。」

461. 一体、如何なる意味で命令はその遂行を予期するのか。——命令は、後に遂行されるであろう事を、今命令するのである、という事によってか。——しかし、命令が予期するのは、実の所、「後に遂行されるであろう事、或いはまた、遂行されないであろう事」でなくてはならないであろう。そしてこれは、何も言っていないのである。

「しかし、たとえ私の希望は、事態がどうなるかを決定しないとしても、それでもなお、事実は今やその希望を満たしているか否か、という、その事実の話題を言わば決定しているのである。」[その通りである。]我々は、或る人が未来について知っているという事 [例えば、科学的予測] には——ほとんど——奇異の念を抱かないが、しかし、彼がそもそも(正しいにしろ間違っているにしろ) 予言することが出来るという事 [例えば、ノストラダムスの大予言] には、奇異の念を抱くのである。

予言は、唯それだけで(その正誤に関わりなく) あたかも既に未来を予示しているかの如くなるのである。ところがそれは、未来について何も知らないのである。それに勝る無知はないのである。

[予期と予測と予言の違いに注意せよ。はっきり言えることは、希望は、事実がその希望を満たしているか否か、という、その事実の話題を決定している、という事である。]

462. 私は、彼が眼の前に居ないとき、彼を探すことが出来る。しかし私は、彼が眼の前に居ないとき、彼の首を吊すことは出来ない。

人は次のように言いたいかも知れない。「私は彼を探すとき、彼はとにかく何処かに居なくてはならない。」—— [しかし] そのときは、私が彼を見つけることがないとしても、彼はとにかく何処かに居なくてはならない。そしてまた、彼がそもそも [何処にも] 居ないときにも、彼はとにかく何処かに居なくてはならない。[勿論、そんな事はない。]

463. 「君はその人を探していたのか。君は、その人が居るかどうかを、そもそも知り得なかったのに！」——しかしこの問題は、数学における探究において、実際に生じるのである。例えば人は、次のような問を立てることが出来る。如何にして角の三等分 [という、そもそも存在しない事] を探すといった事すらも可能であったのか。

464. 私が教えたことは、明白でない無意味 [「私が彼を探すとき、彼はとにかく何処かに居なくてはならない。」] から明白な無意味 [私が彼を探すとき、彼がそもそも何処にも居ないときにも、彼はとにかく何処かに居なくてはならない。] へと移行するという事、これである。

465. 「期待は、何が起ころうと、それが期待と一致しなくてはならないか否かであるように、行われる。」 [その通りである。]

さて、人が次のように問うたとしたら、どうであろう：それでは事実、それが期待と一致するしないによって分類されるのか、或は、そうでないのか。——即ち期待は、[一致するしないの] どちらかの意味で、出来事——たとえそれが何であろうと——によって応じられるであろう、という事は決まっているのか。これに対しては、人は次のように答えなくてはならない。「その通りである。但し、期待の表現が定かでない、例えば、種々の可能性の選言を含んでいる、というのでない限り。」

## II

以上において私は、第427節から第465節までを、「志向性に係わる部分」として取り上げた。しかし、「志向性」という語は一度も出てこない。そこで次に、それらの節が如何なる意味で「志向性に係わる部分」であるかという事を、述べておきたい。

それらの節では、思考、願望、期待、想像、命令、そして、探すといった事が、扱われていたが、

「思考する」とは、何かを思考することである。

「願望する」とは、何かを願望することである。

「期待する」とは、何かを期待することである。

「想像する」とは、何かを想像することである。

「命令する」とは、何かを命令することである。

「探す」とは、何かを探すことである。

一目瞭然、これらは全て

「Xする」とは、何かをXすることである。

という形をとっている。ただ単に、目的語なしに、「Xする」と言うことは意味を為さないのである。「期待する」とは、例えば、彼女が来る事を期待すること、なのである。したがって、私が彼女が来る事を期待するとき、そこで期待されている当のものは、既に私の期待の中に概念上本質的に入っているのである。そしてその意味で、期待と期待される当のものとの関係は、内的であり、文法的なのである。期待される当のものが少なくとも概念上は存在しなくては、期待はあり得ないのである。(但し、その逆はあり得る。即ち、期待される当のものは、たとえ期待されないとしても、あり得るのである。)したがって期待は、期待される当のものが少なくとも概念上は存在するとした上での期待であり、当にその期待される当のものを期待しているのである。そしてその意味で、期待は期待される当のものを「志向している」と言ってよいであろう。例えば、私が彼女が来る事を期待するとき、それは当に、彼女が来る事を期待するのであって、彼女以外の如何なる人が来ることをも、期待しないのである。そしてその意味で、私が彼女が来る事を期待するとき、それは当に、多くの可能性の内から、他ならぬ彼女が来る事を選択的に「志向している」と言ってよいであろう。